2024 年 12 月

氷華集　　当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

秋うらら箱の土偶は膝抱へ　齋藤亜矢
中秋や台湾柚子は柚子に似ず　小嶌　和
鉄路空路無事参集の野分晴　朝田玲子
秋時雨軒先たどる小町下駄　牧田満知子
阿弗利加より時差の名月いま届く　大石高典
名を得しはいつより紫式部の実　河村純子
蕎麦猪口をぐい呑にして秋の夜半　片山旭星
海峡の真中の島や鰯雲　森川惠美子
三日月やボール突く音まだ止まず　加藤　剛
宗達の白象の眼や秋澄めり　谷口文子
県境へ刈田の増ゆる湖西線　中島冬子
夢二忌や和文具求め銀座へと　富沢壽勇
一片のしろがね囮鮎流し　福江ちえり
駄菓子屋のくじや入日の休暇明　碓氷芳雄
手料理の一品多し秋の暮　田中　勝
新涼の丸竹夷二と歌ひ　佐藤慎一
心ゆるぶごとく宗旦木槿かな　西五辻芳子
赤とんぼ負はれし姉の七回忌　植田清子
子の秋やトイレにお化け出るといふ　川内一浩

氷室集

ソプラノとアルトのフーガけらつつき　福のり子
芋殻や祖母の酢加減このくらゐ　朝田玲子
月しろとふ菓子や月白眺めつつ　谷口文子
喪の家に笛の音止まる在祭　鈴木大輔
秋空をくの字への字と鳥の群　加藤　剛
一つ家の離れてふたつ秋ともし　有岡萃生
小舟漕ぐはや逝く夏を追ふやうに　加藤広文
蟋蟀を追うて掃きだす朝となり　伊藤　惠
新米をまづは一口喰つてみる　福田将矢
重陽の菊の着綿外しみる　河村純子
かなかなや仕事の進む日暮前　大石高典
雨脚の消えゆくあたり鉾の辻　田中白秋
吾が書いてわが読めぬ文字蚯蚓鳴く　玉元庄弘
歩くほど無口となりぬ男郎花　伊東弥生
日本地図に酒蔵探す初紅葉　森川惠美子
名月やクルーズ船の窓光る　幸城麗子
グラナダへ走るオリーブ実る道　城戸崎雅崇

秋近し菓舗にくり色ぶだう色　宮坂美緒
鹿の目の闇に飛び出す東大寺　細見昌子
アイロンの湯気に冬立つ仕上げ馬　土居郁雄

2024 年 11 月

氷華集　当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

アンデスの笛吹壺の音の涼し　齋藤亜矢
峻嶺の風や住職西瓜切る　朝田玲子
秋近し浮雲いちだんと低し　加藤　剛
信号のすべて赤なり神輿行く　谷口文子
風の来し方へ目のいく残暑かな　片山旭星
八朔や黒紋付と行き合へり　中島冬子
バリ島の路肩覆ふや籾筵　富沢壽勇
山積の畳紙の色の土用干　河村純子
釣るるたび玉網走る鯆の船　大石高典
水指に蓮の葉蓋や雨の粒　西五辻芳子
タレントのひと言のあり阿波踊　佐藤慎一
益荒男のエイサー太鼓高らかに　津嘉山典
バオバブの木なり地の果て夏の果　川内一浩
卸し金手ざはり深く山の芋　中井昭雄
ふるさとへ残暑と猫を乗せてゆく　牧田満知子
応挙の絵納むる寺の法師蟬　森　壹風
黙禱のしじまや鐘と蟬時雨　碓氷芳雄
経の声際立つ御堂生御霊　大野邦夫
思ふこと声となりけり夜半の雷　福江ちえり

氷室集

雪渓を仰ぎ鞍紐締め直す　河村純子
草茂る隣家遠くなりにけり　福のり子
看板の黄文字のみ褪せ晩夏光　朝田玲子
八月に想ふ八月それぞれに　有岡萃生
秋暑しシャム文字のみのお品書　福田将矢
雷わたる庇つらねし港町　加藤広文
御目なき被爆のマリア蟬時雨　田中白秋
検査待つ刻の重さや虫の声　牧田満知子
新涼や痩軀を屈め調律師　鈴木大輔
返事いまも優等生よ生身魂　伊東弥生
木曽川や鮎の釣糸風に舞ひ　田中　勝
折り山の力抜けたる捨扇　石上敦子

笑はむと唄うて泣いて盆の月　川内一浩
音立てぬ章魚の逃げ足速きこと　大石高典
異邦より同行二人秋遍路　富沢壽勇
小面の口角高し虫払　谷口文子
新涼や豆腐の角は九十度　片岡和子
幾年か苦きゴーヤー口に慣れ　津嘉山典
五寸皿並べて干して美濃の秋　加藤節江
ちちろ鳴く市営球場外野席　柳堀悦子

2024 年 10 月

氷華集　10 月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

朝凪や湾を割りゆく舟ひとつ　朝田玲子
スケッチの汗やきりんの頚の骨　齋藤亜矢
揚幕へ風は夏なり太郎冠者　河村純子
片蔭の細きを夫のはみ出して　谷口文子
紅き蓮白き蓮へと風渡る　中井昭雄
擦れ違ふ無言詣へ知らぬ振り　中島冬子
ひろしまの空に祈るや長崎忌　碓氷芳雄
最寄駅まで山鉾の五つ六つ　佐藤慎一
静けさの長き一秒はたた神　田中　勝
西山に続く北山雲の峰　片山旭星
祇園会やあふぎに仕切る音頭取　西五辻芳子
歳時記と辞書を重石に鮨を押す　大石高典
山の峰へ重ぬるやうに雲の峰　津嘉山典
白南風や木橋もて越す大井川　富沢壽勇
はやり唄聴きながら聞く蟬のこゑ　川内一浩
丹波路や海はなくとも青田波　森　壹風
見てみたき彼方の裏や雲の峰　友永基美子
クロールのとなり気にして逸れゆけり　加藤　剛
夕闇に白き花の香沖縄忌　植田清子

氷室集

伝説も民話も蚊帳の知るところ　加藤広文
手を繋ぎなほし祭はたけなはに　朝田玲子
宵山や子は初めての子を抱き　谷口文子
曇天を打ち砕くごと皐月波　宮坂美緒
十本の腕つかみ合ふ吾と蛸　大石高典
冷房の嫌ひな猫と知恵比べ　河村純子
虫干や伸子一本落ちてをり　土居郁雄

雲の峰砂場に砂の舟と波　伊東弥生
帰省三日はや子の話尽きにけり　有岡萃生
夾竹桃始業ベルまであと二分　牧田満知子
島結ぶ航跡白し瀬戸の夏　碓氷芳雄
夏の日や碧なす底へ潜水す　津嘉山典
境内に風鈴の音を商へる　川内一浩
サイレンの鳴らぬ八月六日なり　鈴木大輔
水筒に水出し緑茶雲の峰　幸城麗子
大き羽根一つ落として親鴉　加藤　剛
夕暮や団扇片手の野球場　中井昭雄
笈摺を壁に吊りたり夏座敷　田中白秋
父の功よ石山寺の避雷針　柳堀悦子
蓮の露に南無阿弥陀仏とふ朝　伊藤　惠

2024 年 9 月

氷華集　9 月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

調律のけづりは僅か祭鉦　朝田玲子
インドサイ僅かに動く五月晴　大石高典
清水の舞台や袖の青楓　谷口文子
漆黒の粒や星なき天道虫　齋藤亜矢
真つ新の母衣蚊帳居間のど真ん中　前田鈴子
碑をなぞる手の老ゐたるや慰霊の日　片山旭星
古衣に午後の華やぎ村祭　牧田満知子
時計塔を駅前にして夏の草　加藤　剛
大南風唸りを上ぐる屋敷林　大野邦夫
風穴に大地の息よ夏の雲　森川惠美子
吾が声に父の声あり朴の花　富沢壽勇
天空へ柏手ひびき滴れり　西五辻芳子
禅寺の苔けざけざと梅雨入かな　森　壹風
極めたるぼうたん値引札貼られ　中島冬子
釣竿の先とうすみの止まりたり　中井昭雄
暮れなづむ山気の底ひ捩り花　福江ちえり
風鈴の弱く鳴りたりカレーの香　碓氷芳雄
大の字や風の動かぬ夏の夜半　田中　勝
栴檀の花潮風の通り道　石原ゆき子

氷室集

寧歳を願ふ小さき手慰霊の日　津嘉山典
桑の実を鳥の気分にて齧る　大石高典

伊豫街道に賑はひ戻る祭まへ　朝田玲子
白夜行トナカイ幾千地平まで　牧田満知子
銀色に光る地上絵なめくぢり　小堀恭子
焼き鏝の止血法とや汗の引く　富沢壽勇
遠方より友が来たれば初鰹　宮坂美緒
緑蔭や迷悟の笠の置かれあり　田中白秋
千日回峰僧走る梅雨の朝　谷口文子
山滴る標高千の小学校　柳堀悦子
辻々に御幣を立てて村祭　大野邦夫
浜よりの歓声すでに子らは夏　加藤広文
明日へ螺子巻く音の欲し時計草　伊東弥生
波音や生きて行かうと決めて夏　川内一浩
片蔭に寄せてワゴンの廉価本　有岡萃生
朝明けの風ゆさゆさと合歓の花　加藤　剛
合鴨の除草ぐわぐわ五月晴　宮坂千種
夏至の日や夕餉の前の絵本読む　佐藤慎一
守宮啼く異国の宿の内外に　山本京子
風鈴や上履洗ふ日曜日　幸城麗子

2024 年 8 月

氷華集　当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

画家の目をたどり見るごと薔薇の赤　齋藤亜矢
拭き込みし鞍のずしりと夏の雨　朝田玲子
蚕豆の弾けさうなり低気圧　大石高典
このあたりの者にござると御器齧　河村純子
磯の香を利かばあの日に戻る夏　川内一浩
掌に粗塩尖る初がつを　牧田満知子
ひと房を隣の墓へ手毬花　福江ちえり
天井を我が物がほに守宮啼く　津嘉山典
校庭の陰に一樹の残花かな　加藤　剛
松の枝払ふ隙間の鬼瓦　谷口文子
葉桜に揺れ長崎の千羽鶴　碓氷芳雄
二葉あふひ育てあげたる子の無口　西五辻芳子
旅先の黄雀風やエアポート　田中　勝
夏めくやチャツボミゴケの光る川　森川惠美子
賑やかや結の田植の恋ばなし　前田鈴子
短夜や眠れぬ時のクールジャズ　片山旭星
若草山踏むに跣の昼下がり　森　壹風

すれ違ふ鬢付の香や五月晴　田崎セイ子
老鶯の方言めくよ島の旅　石原ゆき子

氷室集

さよならと雪形に言ふ北の窓　加藤広文
日蝕や波打つやうに雪柳　福のり子
残照へひとつばたごの花香り　朝田玲子
蟇の住める山やここよりアスファルト　福田将矢
駅地図の指す現在地つばめ来て　加藤　剛
長竿の爺釣上ぐる稚鮎かな　大石高典
母の日の紅濃く少し紅くして　河村純子
手放しし筈の想ひ出夏の風　川内一浩
眼力の達磨大師や木下闇　細見昌代
頼政の塚の色めく緑雨かな　森　壹風
前を行くこゑを恃みの蛍狩　片岡和子
三界へ夏蝶は瑠璃放ちけり　田中白秋
雷鳴や暗夜を照らし大典太　宮坂美緒
紅ばらの夜明けに放つ香の高き　伊東弥生
貝ボタンの光なないろ夏はじめ　津嘉山典
父と子の飽きず出てこず菖蒲風呂　宮坂千種
小窓まで木遣聞ゆる祭かな　斎藤よし子
こども等の留守にしてをりこどもの日　谷口文子
一匹の蚊にてこずるも車中にて　中井昭雄
バケットの焼き上がるとき青時雨　大辻　都

2024 年 7 月

氷華集　当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

引力の加減見るごと花筏　齋藤亜矢
古書繰ればこはれさうなり春の夢　牧田満知子
三度目の春や戦禍のウクライナ　小嶌　和
どことなく駅のよそゆき四月の来　加藤　剛
水口を囲むやうなりみづがらし　朝田玲子
修司忌や喫煙室の戸の重き　河村純子
石鹸の香の掌や菜種梅雨　谷口文子
庭先の賑はひ一つ紫木蓮　中井昭雄
秒刻む音の無機質アイスティー　碓氷芳雄
春闌くや湖西に田圃ととのひぬ　中島冬子
くらやみや春蚊の放つ超音波　大石高典
風穴に蚕種の眠る桜どき　森川惠美子

山笑ふ真昼に点る工事の灯　福江ちえり
五十七年ぶりの名跡風光る　佐藤慎一
桜鯛跳ぬる水面や鞆の浦　田中　勝
花冷や負の遺産てふ畑広し　森　幸子
独り居のふと寝落ちたり春の昼　川内一浩
軽やかにサティのピアノや春の宵　片山旭星

氷室集

風垣解く砂は流るるごとく落ち　加藤広文
叡山へ着かず途中の蕨採　鳥居裕子
桜一花てのひらに見せ見舞客　福のり子
修二会僧箒の音と闇へ消ゆ　小嶌　和
道草に駒の進まず夕永し　朝田玲子
海望む百と十二の蝌蚪の群　福田将矢
百万遍へ坂ゆるやかに春暑し　有岡萃生
麗かや巨船の浮ぶ海平ら　片岡和子
藪蕎麦の門の賑はひ花馬酔木　富沢壽勇
畦道を行くも一人の遍路かな　河村純子
水すまし水の段差をやりすごし　伊東弥生
竿引けばひかる鱗や夏隣　牧田満知子
夢殿の闇を切り裂き春の雷　田中白秋
雨近し地を這ふやうに飛ぶ燕　石上敦子
釣糸を一気に引くは桜鯛　大石高典
観音山の大瑠璃見れば啼かぬなり　美崎昌子
菜の花や鷗飛び交ふ大和川　加藤　剛
飛花落花路面電車の音軽き　碓氷芳雄
紙風船ほつぺばかりが膨らんで　前田鈴子
遠回りして知らぬ地や春の海　宮坂美緒

2024 年 6 月

氷華集　当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

草青む柱の錆の目立ちそむ　加藤　剛
ぷつくりとゆで加減良し蛍烏賊　朝田玲子
行く雁や峠の先は母の郷　牧田満知子
逢ひたしが口癖となり月おぼろ　川内一浩
囀や太極拳の手足止め　河村純子
椰子酒の発酵すすむ石鹸玉　大石高典
川辺を出町柳へ春ひと日　中島冬子
春宵や寄り道しての酒と蕎麦　中井昭雄

車椅子駅伝の空うららけし　谷口文子
冴返る濃淡深き雲龍図　片山旭星
上靴の親指の穴卒業す　大野邦夫
誉め上手なる夫のゐてうららけし　西五辻芳子
啓蟄の蟲どち大地肥すなり　津嘉山典
下萌の伝弥久の墓朽ちにけり　福江ちえり
野生化の鸚哥見守り桜愛で　森川惠美子
ごみ拾ふ袋に風や春の空　碓氷芳雄
行く春の強き風音天守閣　田中　勝
早蕨や柩の母の一張羅　前田鈴子
濃茶手にふつと利休忌思ひけり　加藤かず子

氷室集

春灯や本の綴ぢ目の影深し　加藤　剛
入寮者待つばかりなり春の庭　富沢壽勇
藍甕の深み四尺春の闇　朝田玲子
道草をする子のやうに春の水　加藤広文
無造作に卒業証書差し出す子　有岡萃生
まんさくの花おづおづと解きはじめ　福のり子
ヤウンデの夜明前まで遠蛙　大石高典
春昼や屋根より垂るる縄梯子　谷口文子
影ばうし水面に遊ぶ春隣　牧田満知子
ひとひらの雲を目指してひばりかな　中井昭雄
竹林より風はおさまり春浅し　田中　勝
白々と暗き座敷の雛飾　河村純子
東雲の里にふんはり初ざくら　田中美千代
紅梅や月の光は欺かず　田中白秋
山笑ふ押せば恐竜唄ひ出し　伊東弥生
はくれんの空へ吸はるる心地して　宮坂美緒
三泊が四泊となり春の旅　石田信之
行く春や引揚げのまち雨にぬれ　小川妙子
お披楽喜の後の乾杯春の宵　佐藤慎一
隅田川の橋なり三月十日なり　柳堀悦子

2024 年 5 月

氷華集　当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

春雨や新刊の文字日がな追ひ　朝田玲子
街路樹の空師老練春隣　丹羽康夫
節分の振舞餅を八橋屋　中嶋文子

手がかりは点から線へ梅の花　齋藤亜矢
まだ土の中のものへと春の雨　小嶌　和
吉田寮勝訴のニュース春兆す　大石高典
あたたかやローカル線の紙切符　森川惠美子
叡山見えず雨降りの春寒し　片山旭星
雪嶺を窓に最終講義受く　福江ちえり
うららかや紙カルテ繰る診療所　牧田満知子
春寒や老職人の窯終ひ　谷口文子
戦時下の子等のことなど春遅し　西五辻芳子
済州島の入江燦たり海女の笛　富沢壽勇
足並は阿吽の呼吸うららけし　津嘉山典
大地震に思ひ出したり蜃気楼　中井昭雄
紅茶より珈琲が好き風光る　河内一浩
縁石の太き影なす草の霜　加藤　剛
小走りにごみ出す朝よ冴返る　碓氷芳雄
若布売る米と換へたる昭和あり　前田鈴子

氷室集

弔へ白き道なり椿落つ　福のり子
七日過ぎカフェに置かれし募金箱　田中白秋
植込の輪郭やぶり春の草　朝田玲子
浪に明け風に暮れけり冬の佐渡　加藤広文
締切を越しつ越されつ春の夢　大石高典
春めくや新築の香の残る家　小嶌　和
うららかや横臥の猫のピエロ顔　牧田満知子
立春や観音様の買はれゆく　谷口文子
蓮根植ゑ換へる雲水総出なり　伊東弥生
春立つやひとはたきして畳む服　加藤　剛
裏山は梅酒の梅よ梅白し　丹羽康夫
大鷹のひそむ狩場よ摩天崖　細見昌代
宇治川の空に並びて雁帰る　中井昭雄
雪と知る新幹線の荷物棚　森川惠美子
をちこちの命を繋ぎ桜守　津嘉山典
猪罠に猪は掛らず猪の糞　新藤克彦
古老てふ四百年の古梅かな　山﨑こうじ
きさらぎの肌に冷たき西行忌　山中伊蘭子
空近き山の出湯や残る雪　石上敦子
湖へ光流るる春の川　田辺美代子

2024 年 4 月

氷華集　　4月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

押さふれば伊勢海老ぎぎと責むるごと　朝田玲子
九歳の引きずる丈の破魔矢かな　谷口文子
替へましよと鷽替せしも七日はや　西五辻芳子
冬の日や切りたて青き大谷石　小嶌　和
壁紙の跡にぴたりと初暦　加藤　剛
餅搗の杵の重さにたぢろぎぬ　河村純子
冬深し白鷺城の白に影　田中　勝
神棚の梅ほころびし小正月　中島冬子
珠洲焼のぐい呑み能登は冬の雨　片山旭星
落鱸の口より鰯飛び出しぬ　大石高典
カランより糸引く水や冬深し　碓氷芳雄
青森の地鶏加ふる雑煮かな　津嘉山典
初旅や河童も雪もなき遠野　丹羽康夫
藁屑も苔も葛屋の大氷柱　前田鈴子
わが雑煮継ぐ者なしと父の言　佐藤慎一
常磐木の空に風音春近し　福江ちえり
初神籤かの件忽と腑に落ちて　富沢壽勇
京なれや鋤焼鍋に九条葱　植田清子
湖の朝の煌めき四温なる　大野邦夫

氷室集

左義長の火照りに弾む国訛り　朝田玲子
初魚や雁雑平目釣り上げぬ　大石高典
春を待つとは復興の酒造　福田将矢
ポケットの底の砂つぶ初仕事　伊東弥生
双鶴の茶盌を首座に初商　谷口文子
軍装を解く世はいつぞ冬銀河　加藤広文
カーテンに影絵となりし軒氷柱　大畑照子
米こぼす別れ際とて駄々ける子　杉浦康子
降る雪を光らせてのち冬の雷　小嶌　和
一献の交換として初謡　河村純子
村中へ切り分け寺の鏡餅　大野邦夫
街灯のやけに眩しき冬の月　加藤　剛
冬帝を伴に宇治橋渡りけり　田中白秋
大地震より二十九年寒怒濤　西五辻芳子
凍星や避難施設のめつた汁　入江祐子
書初や左はらひを幾たびも　小堀尚美
重箱に組絵のごとし節料理　小堀恭子
丹波路や父の祝の牡丹鍋　中井昭雄

正月や地震の報に酔ひのさめ　寺川貴也
快晴の朝の電線初雀　齋藤　耐

2024 年 3 月

氷華集　2024 年3月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

塾よりのかへりはまだか虎落笛　碓氷芳雄
冬茜身を細くして陶器店　仁田　浩
まつすぐに冬田を分けて用水路　小嶌　和
見習の選ぶ冬芽や庭鋏　朝田玲子
足もとをふくら雀に取られけり　加藤　剛
背の帯をぽんと叩くも冬麗ら　河村純子
船宿の軒に大根劔崎　大石高典
創業は江戸期なりけり蕎麦湯飲む　丹羽康夫
冬の夜やホットワインに鬱金の香　片山旭星
ぼろ市や代官餅のずつしりと　富沢壽勇
銭湯の釜の火落とす年の果　中島冬子
冬の日や右はうれひの般若面　谷口文子
神棚に無沙汰を詫ぶる煤払　中井昭雄
冬うらら舫ひ繋ぎの影あそび　牧田満知子
大雪の節季や能舞台に立ち　西五辻芳子
影ひとつ旅に伴ふ冬銀河　城戸崎雅崇
燭の火に辿る譜面やクリスマス　福江ちえり
さはるな危険と山陰の松葉蟹　田中　勝
瓦斯灯や冬の授業の帰り道　宮原亜砂美

氷室集

ビルひとつ引算さるる今朝の冬　朝田玲子
塩打つや松かさ揚の若狭ぐじ　鳥居裕子
かろがろと国境越えよ尾白鷲　福のり子
柚子湯得て善根宿の夜となりぬ　田中白秋
冬の日や無人舞台は幽かなり　河村純子
崩落の薙へ初雪男体山　小嶌　和
太公望湾処に集ひ年惜しむ　杉浦康子
洋館にモスク意匠の暖炉かな　富沢壽勇
仏壇のみしと冬の夜震度一　加藤広文
寒波来と白く輝き普賢岳　杉本伸一
津軽の雪「などさ」に「わゆ」と答へけり　井本陽子
大雪や祠新たに屋敷神　原田久仁一
室咲の自づとここに枯るるまで　仁田　浩

岩越えて蘇鉄林へ寒の濤　玉元庄弘
島なれば風の機嫌の冬日和　片岡和子
オンライン会議は続く冬の暮　大石高典
冬の日に井戸端の苔かがやけり　国兼弓華
癒ゆるとは両手に溶ける今朝の霜　牧田満知子
伝説の沼に木枯吹き止まず　柳原悦子
根なし山の麓より見る冬銀河　森川惠美子

2024 年 2 月

氷華集　当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

家のうち重くなりたり冬支度　朝田玲子
恐竜の食みし銀杏嚙みしめて　齋藤亜矢
背伸びして届かぬ鏡冬近し　谷口文子
母抱けば片手に軽し今朝の冬　牧田満知子
自然薯の曲り具合を買ひにけり　丹羽康夫
庭師ふたり右は見習松手入　中島冬子
鯊舟は沖に出でたり鯊落つと　大石高典
敲つや茶室の屋根に初霰　河村純子
自然薯は木の根に隙間あるままに　仁田　浩
在りし日の商都の河や冬の虹　碓氷芳雄
さびしさの寄り添ふ後の更衣　小嶌　和
銀杏散る座談してゐる輪の中へ　加藤　剛
北国の真つ赤な落葉風止まず　田中　勝
風の夜の願ひは幾つ咳ひとつ　川内一浩
立冬や朝餉のかをり立つ厨　津嘉山　典
波音や犬吠埼の星月夜　森川惠美子
難民と呼ばれし民や冬の月　片山旭星
防人の児をおもふ歌冬安吾　西五辻芳子
払ひては眺めて父の冬帽子　福江ちえり

氷室集

砂つまむ指の先より今朝の冬　加藤広文
付添は朝の月なり再検査　福のり子
虎落笛だいだらぼつち出でて来よ　柳堀悦子
浅間岩の色さめゆくや村時雨　朝田玲子
鳥影を指差し数へ秋の暮　加藤　剛
山陰に底冷え潜む旦暮かな　片岡和子
階下よりせつけんの香や星月夜　小嶌　和
杖音の石段の数へ秋の暮　仁田　浩

秋風や踝なづる行者橋　田中白秋
ボサノバのリズム外して枯葉散る　河村純子
振り回すタオルは棒よ冬北斗　碓氷芳雄
恐竜の尻尾にリボンクリスマス　伊東弥生
ずつしりと冬めく空とドイツパン　谷口文子
時雨るるや点描のごと池に星　津嘉山　典
釣船にさんま大漁知らす旗　米倉大司
狼を祀り縄文犬のこと　大石高典
永観堂逆さ紅葉に散るもみぢ　中井昭雄
岩崎邸ハイドン響くしぐれかな　富沢壽勇
寒濤に蘇鉄は岩を砦とす　玉本庄弘
軒下に篠竹結び吊し柿　森川惠美子

2024 年 1 月

氷華集　当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

笑栗や棘のおりなす角度愛し　齋藤亜矢
撫でてみる根魚の腹の平たきを　大石高典
島に一座の田の神様に稲穂波　仁田　浩
放射光加速支ふる柿の里　朝田玲子
柿渋の畳紙昭和の文字擦れ　河村純子
弟子の運ぶ大き座布団大相撲　小嶌　和
ゴンドワナ大陸のごと秋の雲　森　壹風
絵馬に見ゆる長き英文萩日和　富沢壽勇
蓑虫の鳴くと聞ゆる風の音　中井昭雄
天晴れと二着を称ふ運動会　谷口文子
飛び乗りしバス遠回り秋の波　佐藤慎一
客ひとり亭主ひとりの夜長かな　片山旭星
まだ青きどんぐり踏んでしまひけり　加藤　剛
新之助とやどんと着く今年米　中島冬子
洞窟に繭の香残り秋寒し　森川惠美子
あたり待つ生餌の縮む白露なり　牧田満知子
栗ほくほくと天麩羅の薬味塩　田中　勝
退院に名札を返し天高し　碓氷芳雄
島影を消し去る釣瓶落しかな　津嘉山　典

氷室集

莢蓬の実は未だしと鳥の来ず　朝田玲子
どんぐりのころがる回転速度増し　齋藤亜矢
田も畑も爆撃の無き秋の空　加藤広文

梨狩の食べ放題と言はれても	仁田　浩
穭田の風不揃ひにざくと吹き	森　壹風
銀馬鳴くや船の上にも秋の潮	大石高典
最上川へ秋の田広く影落とし	小嶌　和
小牝鹿のただ一声のそれつきり	河村純子
狛犬に「獻」なる文字や天高し	新藤克彦
擂粉木は夫の手造りとろろ汁	伊東弥生
更待月の寝床読書に耽りけり	加藤　剛
四肢の伸ぶるはやさに後の更衣	佐藤慎一
算数の好きな子と居る夜長かな	谷口文子
山栗の落つる音ある比叡かな	西五辻芳子
丹波路は暮れ朱鷺いろの秋桜	牧田満知子
脱衣所の湯気を掻き消す隙間風	碓氷芳雄
爽涼の声明に身をゆだねけり	細見昌代
富士山の裾野の川や律の風	田中　勝
墓じまひ終え燃ゆるがに彼岸花	田中白秋
琵琶湖より吹きくる風や菊日和	中井昭雄